

張愛玲『沈香屑—第一炉香』¹ 小論 — 衣装から読む女性像 —

楊 韻

キーワード 張愛玲 第一炉香 衣装 女性像

1. はじめに

張愛玲は『更衣記』でファッションについて次のような見解を述べている。「日進月歩するファッションは活発な精神や斬新な思想を表すとは限らない。むしろ、(人々の)沈滞する様子を表しているかもしれない」²。張愛玲小説に登場する色とりどりの服飾をまとう女性たちが互いに暗闘しいがみ合うシーンは枚挙に暇がない。『沈香屑—第一炉香』においても、張愛玲は服飾に紙幅を費やしてディテールまで筆を運んだ。それは正に池上貞子(2004、79頁)が論じた通り、衣服は「登場人物の心理状態やストーリーの展開にかなり重要な役割をはたしていた」。鄭如氷(2009、28頁)は、張愛玲の作品における服飾描写はキャラクターの性格の特性や精神的な変化に留まらず、人物像を作り上げていることにも一つの重要な要因であると述べた。王勝群(2014、13頁)は、服飾にはそこに「投射されている人間の心理」及び人間性へと深化させる力があり、服飾描写こそ「張愛玲文学の重要なテーマ」であると明言した。しかし、これらの先行研究は張愛玲本人の衣服への執着を紹介するだけか、或いは張愛玲文学における服飾をマクロの角度から把握するに留まり、ミクロの分析はまだ不十分である。

本稿はこれらの研究成果を継承し、『沈香屑—第一炉香』(以降、『第一炉香』と略す)における服飾描写を選出し、分析したい。衣服は人の着脱動作によって、静態から動態へ・動態から静態へと状態が変わってくる。本稿では、登場人物は自分の思う通りに行動できる場合に着用する衣服を「踊れる」衣服、逆に受動的に他人の言いなりになって利用される場合に着用する衣装を「踊れない」衣服と設定する。この設定に基づき本稿は、『第一炉香』において、日中戦争の戦火が激しくなった時代から生き延びていて、勉強を成就しても適切な職に就けないヒロイン葛薇龍と、人生の伴侶を探しても自らの寂しさを上手く対処できない梁夫人など主要登場人物について、能動的意思を通す・通せない女

性像が、小説の展開に従ってどのような「踊れる」・「踊れない」衣装を纏っているのかを分析してみたい。その上で、「それぞれの衣服に住んでいる」³女性たちを衣装という殻から引っ張り出し、小説で言語化されている彼女らの行動・心理に加えて、衣装から彼女らの素顔を読み取ることを目的とする。

本稿は『第一炉香』の物語の進行にそって、まず主要登場人物が出せろう、薇龍の梁宅訪問の日における女性たちのファッションスタイルを検討する。次に、「踊れる」衣服と薇龍が出逢う場面を分析する。最後に薇龍が梁夫人の思惑通り喬琪と結婚するに至るまでの重要なシーンにおける服装と、結婚後の焼けた衣服と薇龍の墮落との関係性を分析する。以上の手順で、『第一炉香』における主要な女性像をその衣装を通じて考察したい。

2. 衣装を纏う女性たち

本節は、小説の冒頭、薇龍が初めて叔母梁夫人の邸宅を訪ね、客間で待たされている場面の薇龍と女中たちの服装と、帰宅した叔母の外出着、着替えてくつろぐ叔母の部屋着を検討する。

薇龍が梁夫人の邸宅の客間に通され、ガラスの扉に映った自分の容姿を見た途端に、我々も語り手の目線から薇龍の学生服姿を垣間見ることができる。それは薇龍が就学していた香港南英高校の制服である。

薇龍はガラスのドアにうつった自分の姿をちらっと見た——彼女自身も植民地特有の東洋趣味の一部だ。彼女は南英中学の一風変わった制服を着ていて、紺碧色の竹布ブラウスは膝まで垂れ下がり、下には裾がすぼまったパンツを穿き、様式はまだ清末の遺風だった。(『張愛玲典藏全集』 130頁 以降、『全集』と略す)

こわごわと衣装を見直している様子から推測すると、薇龍はかなり姿かたちに気を遣うらしい。小説によれば彼女が着ている竹布のブラウスは「おしゃれ」(同前、130頁)であり、当時イギリスに抑えられた香港政府が欧米からの観光客の期待に応えて、わざと清末の遺風のある「アンティークファッション」を選んだものだ。しかし、このブラウスは本当に「おしゃれ」であるか否かは疑問が残っている。まず、竹布は竹の繊維を主な原材料として活用した生地的一种であり、滑らかで着心地がよい特性がある。陳美怡(2013、162頁)は、1940年代の香港において、粗い綿布生地の「上衣下褲(上には長着、下にはル

ーズパンツ)」が一般大衆の服装様式であり、このようなゆったりしたデザインは家事や労働に都合がいいと指摘した。また、女子生徒の制服は「女子無才便是徳（女性は才能を持たないからこそ品格が備わっている）」⁴という伝統的な観念から逸脱し、女性の知性を顕彰するファッションであり、社会の進歩とも見なされていた。この角度から見れば、薇龍のブラウスは確かに「おしゃれ」であるが、贅沢の限りを尽くした梁家にある品と比べると見劣っているように見える。この場合、学生制服の着用を強制されていた薇龍の境遇は決して彼女自身の「思う通りになれる」とは言えず、むしろ作作的にアンティーク調に作られた「思う通りになれない」ブラウスと同じと見なされる。

梁家へ足を踏み入れた薇龍は女中たちにばったり出会った。それらの女中たちが履いている下駄も特徴的である。

一人一人下駄を引きずって、ぼくぼくと廊下の床を鳴らしながらあちこち動き回っている。（『全集』 131 頁）

ここで注目すべきところは「下駄」である。陳美怡（2013、162 頁）によると、1940 年代の香港において、民衆は「足には布靴、あるいは下駄」を履くのが普通だと認定される。更に、「一般的な下層階級の人々は下駄を履くのが好みだが、その中、女中や『妹仔（広東語の慣用語である。家事の手助けのため雇われた若い女性を指す）』も含まれる」。陳氏によれば、「妹仔」は家の暮らし向きが困難な上、男尊女卑の封建的思想の影響を受けたため、幼い頃から経済的に裕福な家庭に売られ、召使いとして人生を終わるのが現状であった。このような身分が低い「妹仔」の身なりは、駆けずり回ることの便宜を図るため、かなり地味な装いをしていたようだと言われている。また日本の下駄とは異なり、「妹仔」が履いていた「下駄」は極めて素朴である。デザインは別として、亜熱帯季節風の影響を顕著に受けている香港は四季を通して多雨であり、『南方草木状』⁵によると、木製下駄は「夏月納之可御蒸湿之氣（蒸し暑さや湿気などを防ぐことができる）」という利点があり、湿気が強い香港に適用な製品であると言われる。当然、働くために走り回ることが多い女中たちにとって、デザインがよい靴より、動きやすく、防水性も抜群の木製サンダルを選ばざるをえなかった。即ち、自分の意思でデザインを決められない、「思う通りになれない」状況に当て嵌まると言ってもよい。本文に戻れば、薇龍が見かけた女中たちと、陳氏が取り上げた女中や「妹仔」と非常に類似している。ところが、女中と言っても、幾つかの等級に分かれている。

ドアを開いているところに、朱漆に金彩で梅の折枝模様が描かれた精巧な下駄一足がころころと飛び込んできて、矢の如く左右に偏らずに薇龍の膝に当たった。(『全集』 132 頁)

この下駄は木製ではなく、「朱漆」や「金彩」、「梅模様」⁶も飾りつけられている高級品である。中国では、「朱漆」⁷は厚賞であると共に、一般市民でも負担できるものである。他にも、倪六方(2014)によると、清末の広東省及び周辺地域において、朱塗りの木製サンダルが当時、軽くて便利であったため、若い女性の間で人気を集めており、デザインの違いから身分や地位を判定することができた。また、「金彩で描かれた」、いわば「描金」(『全集』 132 頁)は、金粉を飾り付けとして器や壁などの生地に写し出す技法である。前述のとおり、この下駄はある程度高級な製品であるため、下駄を着用する女中の地位は決して低くないと推測できる。文脈に関連付けてみれば、薇龍にこの下駄が当たった直後、「一人の肌が浅黒い美しい女中が(中略)その下駄を履いて、薇龍に見向きもせず立ち去った」(『全集』 132 頁)ところから、初対面の訪問客に対し、何の関心も抱かない行動を取ったその女中の、傲慢な一面を下駄の様子が表している。また、初めて梁家を訪ねる薇龍が相当目立たない存在であったことも分かる。その上、「思う通りに」傲慢な気風を貫き通してきた女中と、心ならずも下駄に当たられ、更に女中に無視されてしまった薇龍の「思う通りになれない」姿勢が示される。

暫くして、薇龍はようやく鉄扉の付近で梁夫人と出会った。車から降りてきた梁夫人は次のように描写された。

真っ黒な衣服をまっとうして、黒い帽子のつばから緑色のフェースベールが垂れている。フェースベールには指の爪と同じくくらいの大きさの蜘蛛形のエメラルドがついている。(『全集』 133 頁)

張愛玲は『更衣記』の中、「祝日を祝う時、奥さんたちは赤色の服を身につけ、お妾さんたちはピンク色の衣服を着る。寡婦は黒い服を着こんでいる」⁸と述べている。従って、黒い衣服は喪服や死亡、陰険なものを連想させる。梁夫人は既に死去した香港の富豪の妾であり、彼女が着用している黒い服は寡婦の身分を象徴する可能性も高い。一方、鄭如氷(2009、55 頁)は異なる見解を持ち、梁夫人の「黒い服と黒いフェースベールは美しい、神秘的な、そして捕らえ難いものがあるように感じられる」と指摘した。鄭氏の見解は確かに一考の価値がある。なぜなら、黒色は収縮色であるため、黒い服を着ると、視覚的にはス

リムな印象が与えられるからである。いわば、黒い服を着ている梁夫人はスタイルよく見えるため、鄭氏が主張した美しさが感じられるわけである。しかし、鄭氏の主張は一点誤りがあり、梁夫人の帽子は黒いがフェースベールは緑色である。ここで注意したいのは「蜘蛛形のエメラルド」（『全集』 133 頁）である。黒い服と帽子に緑色のフェースベールと蜘蛛エメラルド、これらは梁夫人の腹黒さや、悪辣な手段を使う女として人間像を演出している。蜘蛛形のエメラルドは「梁夫人が身につけた毒性を暗示している」か、梁夫人自身が「一匹の美しい毒蜘蛛」であると鄭氏は述べた。筆者はこの鄭氏の見解に同意した上で、更にこの場面は物語の流れの起点であり、梁夫人の装いを通じて薇龍と梁夫人のこれからの争いの危険性を匂わし、互いに抱いている攻撃性と防衛意識を象徴し、二人の感情がいつか爆発することを暗示すると考える。

黒ずくめの外出着を脱いで、部屋で小休憩を取っている梁夫人は次のように形容される。

ハイヒールの金糸織りサンダルが足の指先にゆらゆらとぶら下がっていて、（中略）頭に被っていた帽子を既に脱ぎ、鸚哥のように鮮やかなマラカイトグリーンの普段使いのターバンをぐるりと巻いている。（『全集』 138 頁）

外の世界には思う通りになれず、寡婦の身分を象徴する黒服をまとい、自分の気持ちを殺してきた梁夫人は、家では思う通りに金糸織りサンダルを履くことによって、自分の欲望を解放しようとする。陳美怡（2011、139 頁）は、1940年代の香港におけるハイヒールブームに言及し、当時最も人気を集めたハイヒールは「甲の部分がゆったりとしたパンプスがあり、先のとがったデザインもある。ほとんどのデザインが頭の部分に花模様を彫り、ツートーンカラーの配色で仕上げたのが普通である」と述べた。これらの「普通」の靴に対し、梁夫人が履いている「金糸織り」のサンダルは希少なものであると考えるが、それを悠々と弄んでいる梁夫人は、贅沢品をかなり使い慣れているように見える。視点を換えてみれば、小柄な（『全集』 133 頁）梁夫人はなぜ自室にいるにも関わらず、フラットヒールではなく、ハイヒールを履くのであろうか。それは梁夫人が小柄であるからこそ、ハイヒールの力を借りて、誰よりも高い所に立ち、屋敷内の権威を示したがるに過ぎないのだ。また彼女にとってハイヒールを履くことは、これまでの努力を無駄にしないように、自らの意志で計略を立て、家においても隙も見せず、完全なる支配者としての地位を強固にする方式である。豪華なサンダルに加え、鮮やかな頭巾もエキゾチックな雰囲気がいっぱい溢れている。

で、「鸚哥のように鮮やかなマラカイトグリーン」という比喻は正に梁夫人の賢い頭脳と狡智を描き切っている。鸚哥は小形な、羽の色も美しい鳥類であり、外見からも梁夫人と似通っている。更に、模倣行為によって人語までもマスターできる鸚哥は動物界でも屈指の智者であり、世渡りの知恵を精通する梁夫人に酷似していると主張したい。その上、人を惑わすような毒々しい翠緑色の羽も、家で派手な格好をする梁夫人と類似し、知らぬ間に梁夫人の匂いやかな美貌に酔いしれ、魅惑される可能性もある。

3. 夢の世界に踏み込む薇龍——「踊れる」衣装との出逢い

上節は複数の女性キャラクターの服装を検討したが、次節は現実から離れた世界に踏み込んだ薇龍の衣装に絞って吟味する。

薇龍は梁夫人に自分の願いを打ち明け、遂に梁夫人の承認を得て、梁夫人の邸宅に住み込んで香港での学業を継続できるようになった。薇龍に与えられた部屋のクローゼットで彼女を待ちうけていたのは、梁夫人が特別に誂えた衣装である。

織り錦の長衣ルームウェア（中略）、海辺に行く時着用するマント、（中略）居間で応接する時着るセミフォーマルディナードレス、ありとあらゆる洋服が揃っている。（『全集』 145 頁）

ルームウェアなど日常生活に欠かせない服飾から、セミフォーマルディナードレスなど社交の場にも腕前を発揮できる衣装に至るまで、全ての面に配慮が行き届いている支度を見て、薇龍は自分用だと気づく前に試着を始めてしまう。この描写より、梁夫人はこれらの衣装を通じて、薇龍を思い通りにすることに成功したと言える。陳美怡（2011、111-122 頁）によると、1920年代の中国を席卷したのは、西洋から伝来された社交ダンスの流行である。特に香港では「当時の中国で最も水泳に熱中した都市と言って良い」ブームが巻き起こった。薇龍を社交の場に出させたい梁夫人は当然、着飾ることは一人前の女性にとってはどれほど不可欠なことか、はっきりと身に染みていたため、豪華な衣服という至高な武器を薇龍に渡し、最高の演出を期待できるように周密な策略を立てた。

梁夫人の衣装攻撃に撃沈され、夢のような世界に沈淪した薇龍は眠りにつき、これらの服がまるで生命を注がれたようにリズムに合わせて踊っている夢を見

た。

下の階はハーハーと喘ぐようなルンバが流れている。薇龍は思わずクローゼットにあるあのラベンダー色のラメ入りシルク生地のロングスカートを連想した。そのスカートはゆらゆらとルンバを踊りこなして、さらさらと音を立てている。(『全集』 146 頁)

これは、学生である現実から離れるという意味で、夢の世界に踏み込む薇龍と、「ルンバを踊りこなし」た衣服とが出逢うシーンと解釈できる。夢と現実が薇龍の脳裏に漂い、高ぶった気持ちと共に入り混じって、彼女は満足した楽しさに浸っていた。上の引用からは、薇龍が階下から漏れてくるメロディーと互いに呼応し合うように、「ルンバを踊りこな」すスカートと舞い遊びながら、心から喜んでいる気分も伝わってくる。学生服の着用を義務づけられている薇龍の視線から見ると、それらの衣服は彼女を興奮させるものであった。上の描写から、彼女はかなり衣服の生地に拘りがあることが読み取れ、生地に楽曲を組み合わせ、自らの小世界の一員として組み入れている。しかし、薇龍自身もこれらの衣服は自分で手に入れたものではなく、梁夫人があてがったものであることを知っている。このまま受け取ってもいいのかという虚しさは、同じく実体のない薇龍の夢の世界に漂い、虚と実の境界線はぼやけ、次第に同一化することを暗示している。更に、上述のクローゼットを開けた後の場面における「これは長三堂子（晩清の上海にある高級妓楼）が一人の娼妓を買い込んだことと何の区別があるの？」（同前 145 頁）という薇龍の自問自答から、目の前に並んでいる服装が実は、他人に操られるための、唯の「踊れない」形骸に過ぎないことに、その時薇龍は気付いていたはずである。言い換えれば、梁夫人のようなやり手が、無条件でこれほどの贅沢なものを薇龍に提供してくれるはずがないことを、薇龍も感づいただろう。だが、梁夫人の衣装攻撃はあまりにも威力があり、まだ十代の少女にとっては大きな誘惑である。上の自問自答に続く「ちょっとだけ覗いてもいいよね！」（同前 146 頁）という台詞は更に晴れ着に誘惑され、高級娼婦の社交界へ足を踏み込んでしまう薇龍の危うい心理を反映している。また、この心理が芽生えることによって、薇龍が夢の世界から破滅へと向かっていく兆しも見えてくる。

4. 破滅への円舞曲——「踊れない」衣装

本節は教会に行く時、薇龍のチャイナドレスや、喬琪の求愛行動に悩まされる薇龍の衣装から、女中睨児の普段着まで潜考する。

夢見心地となった薇龍はまもなく、梁夫人の指示に従って社交界で男性の相手をする生活を送り始めた。ある日、梁夫人の意思で教会に行く予定となる薇龍は女中の睨児に服装の要求を伝えた。

「あっさりした色の服を選びなさい。(中略)」と言っても、睨児は依然として鬱金色に雲影模様をあしらったちりめんのチャイナドレスを探し出した。(『全集』 p150)

『中国服飾百年』(2009、97 頁)によると、新型旗袍はぴったりと体に合っているように引き締まったスタイルとなり、だぶだぶしていた袖口から解放され、デザインもより簡潔で多様となってきた。⁹原文に戻れば、眩い鬱金色が睨児にとっては「あっさりした色」である点から見ると、どうやら意匠を凝らした梁夫人の邸宅では、女中でも豪華に慣れているようだ。鮮やかな色合いに綴られたのは、精巧な雲モチーフであり、拘ったちりめん生地はほのかな光沢と共に輝いている。それは、社交界で順調に頭角を現わしてきた薇龍にぴったりな服装であると言える。更に、薇龍は梁家の扉を開けた日以来、数え切れない晴れ着に着替え、梁夫人の指示通りに色々な社交的任務をこなし、異なる場面に相応しい着飾り方にも優れた才能を発揮できるようになった。それと同時に、薇龍は破滅へと向かっていく。

薇龍の破滅への第一歩は、プレーボーイ喬琪の求愛行動に悩まされ、受け入れざるをえなくなった時である。それまで薇龍は既に喬琪に好感を持ちつつ、世間の評判を考えて彼と一定の距離を保っていた。一方、喬琪は薇龍に対し、薇龍とは結婚をしないが、快樂だけは保証すると本音を打ち明けた。下に挙げるのは、この喬琪との会話のシーンにおける薇龍のいで立ちである。

薇龍は白いズボンを穿き、赤銅色のシャツ、(シャツに)サビが付いていたような緑色のドット柄がばらばらに散らばっている。シャツと同じ色のターバンをぐるぐる巻いて、風に吹かれて頭の後ろになびき、長くてもちりちりとしている前髪が覗いている。(『全集』 167 頁)

金属感が強いシャツと頭巾は、肌と摩擦してシャカシャカと音を立てているよ

うであり、薇龍の心に喬琪に対する愛着と苦痛がこみ上げる様を表している。張小虹（2004、31頁）はこのような布地と皮膚との摩擦を「皮膚エロティシズム（skin eroticism）」と呼び、更にそれは人物の心理と物質の摩擦接触でもあると論じた。白いズボンを着ている薇龍はまだ、恋愛に対して純粋な憧れが残っていて、幸福を自分の手で掴まえたいと願っていた。だが、薇龍は自分の思い通りにはなれず、喬琪が張っている恋の罠にはまった。ここで注意したいのは、シャツとターバンの色、即ち「赤銅色」と「サビが付いていたような緑色」である。張愛玲はここで赤と緑という対照色を用い、薇龍の感情を表した。赤と緑色はここで生命力のない無機質に例えられ、色褪せた重苦しい色彩として提示され、薇龍の矛盾している心境を反映している。赤いシャツは喬琪に対する愛情であり、緑色のドット柄はその愛に対する疑惑や不安である。なぜなら、安定な職業もなく、女性問題を頻繁に起こす恐れがありそうな喬琪は薇龍に不安を抱かせたからである。

それは正に悪夢の始まりであった。喬琪の言葉をかけられた薇龍は遂に方向性を見失った。喬琪との交際は続き、或る蒸し暑い夜に、薇龍は彼とキスを交わした。これは薇龍にとって大胆な決意である。しかし意外にも、喬琪はその帰り道で、薇龍のお付きの女中睨児と偶然出会い、手を出す。

（睨児は）薄い布生地製の白色ブラウスを身につけ、黒い香雲紗生地の一層パーパンツを着ている。（中略）襟周りにあたる部分には一節のむっちりとしたピンク色の首が場違いな感じで露出していた。（『全集』 169頁）

睨児には娘しか持たない魅力が溢れ、特にその「首」は喬琪をそそる曲線美を描き出した。白い上着+黒いパーパンツは1940年代の香港での典型的な装いであり、香雲紗生地の衣料品も陳美怡（2011、165頁）によると、男女ともに好まれていたようである。涼しくて柔らかい香雲紗は睨児にぴったりとはまり、その濃墨色の布地は「ピンク色の首」と互いに引き立て合っている。夏の夜の騒動もその「首」を持つ娘と、下心を持つ男子との間に夏の夜の騒動が幕を開けるが、感心にも、睨児は強い心の持ち主である。自分のブラウスに手を潜り込ませ、みだらな悪戯をする喬琪を、睨児はきっぱりと撥ね付ける。主人の客人である喬琪を容赦なく論駁した睨児は、薇龍付きの女中としては最善を尽くしたと言える。睨児が着ている白い上着と黒いパーパンツは、白黒を転倒せず、是非をはっきりさせる彼女の強かな性格に合っている。

それに反して、薇龍と密会したばかりの喬琪は梁家の庭を出る間も待たずに、女中を揶揄い、浮気性の本性を暴露した。この二股行為は偶然薇龍に目撃され

てしまう。この時点で、薇龍に誤解されてしまった睨児は窮地に追い込まれ、一方、薇龍の学業と享樂とのバランスの崩壊をも加速させた。喬琪の裏切りでショックを受けた薇龍は一荒れして睨児に怒りをぶち撒けてしまい、梁夫人を驚かせた。騒ぎを一刻も早く調停するため、梁夫人は薇龍と喬琪の結婚を急ぎ始める。薇龍は喬琪の件によって、決定的に梁夫人の操り人形となり、完全なる破滅に至った。

下に引くのは、小説の終盤、喬琪と除夜の集いに行くシーンで薇龍が着ているコートである。

その紫青色の地色、銀糸で縫い取られていた「寿」字刺繍模様の錦織りの綿入りコートは既に焼けて一つの穴が開いた。(『全集』 183 頁)

「寿」字の刺繍の意味をここで吟味しておく。謝黎 (2011、56 頁) は京派旗袍を論じる際に、「素材は伝統的な生地 (錦、緞子など) で、モチーフは福祿寿、龍、花などが多い」という特徴があると述べた。これは薇龍が着用している「寿」字づけの綿入りコートと合致する。他にも、「寿」は年寄りを始め、中高年の人に対する長寿の祈願である。¹⁰『莊子』(2010)において、「人、上寿百歳、中寿八十、下寿六十 (人は、最も長寿な年は百歳であり、その次は 80 歳であり、普通に長寿と言って良いのは 60 歳である)」という。薇龍はまだ高校に通いながら梁家での生活を始めることから、喬琪と結婚した時点でも、薇龍は二十歳に届いたくらいの若さである。そのような年頃の薇龍が「寿」字刺繍入りの綿入りコートを着用するのは、薇龍のその後の「喬琪に代わってお金を儲けるのでなければ、梁夫人のために男を引っ張り込む」(同前、182 頁) という悲惨な結末を意味する。更に、「寿」字の刺繍が汚されたのは、思い通りにならない薇龍の人生もその「踊れない」コートのように、見た目は贅沢だが、中身は既にぼろ綿に過ぎないことを象徴している。「第一炉香」もここで燃え尽き¹¹、その煙が跡形もなく消え失せて行く。それは「沈香屑」のように粉々に砕けてしまい、二度と踊れなくなった薇龍の淋しい魂である。

5. 結び

以上より、本稿では『沈香屑—第一炉香』における女性キャラクターの纏う衣装に着目し、それらを着る状況と、色・素材・デザインの歴史文化的背景を合わせて考察することにより、それらの衣装が着用者の気持ちの揺れ動きと同

調し、その意思を反映している様を考察した。

ヒロイン葛薇龍は「踊れる」衣装の誘惑につられて、上流社会において腕前を発揮する機会を手に入れ、僅か一瞬であったが、彼女の思う通りになった。けれども間もなく薇龍は梁夫人の操り人形に身を落とし、上流社会に居続けることの代価として自らを梁夫人に売り渡すのを覚悟した。この薇龍の覚悟は、梁夫人の意思を引き受けることを意味しており、薇龍自身の意思とは言いがたい。寧ろ薇龍は己の意思さえ喪失し、梁夫人の言いなりになって利用されたと考えられる。これは一見、薇龍は梁夫人の思う壺に嵌まったがそうではない。梁夫人は、生涯の気力を全て男性の愛情を獲得しようとすることに専念している。しかし、薇龍を好餌として男性を釣ることはできても、梁夫人がその愛情を得ることもできず、人生を思う通りにしなかった。一方、是非をはっきりさせる性格の睨児は見事に白黒の装いと一体化しているが、薇龍に誤解された上、更に薇龍の破滅を加速した。不本意ながらも喬琪の件に巻き添えにされた睨児は、単に薇龍と梁夫人との博戯の捨て駒に過ぎない。

『第一炉香』は女性たちの虚栄と奢侈への欲望をさらけ出した。彼女たちは皆、「踊れる」「踊れない」衣装や、燃え尽きた沈香と同様、日本が上海、香港を占領していった時代という、刹那的な時代に辛うじて生き長らえることで精一杯で、限られた範囲内で思う通りになったとしても、大勢としては意に反した人生を送ってきた。葛薇龍の妥協、梁夫人の独裁、若しくは睨児の気位と果敢さは、服飾によって表現され、彼女たちが身に纏った衣装は悲惨な運命と闘争し続ける道具となる。

なお、本稿は紙幅の関係から、『沈香屑—第一炉香』におけるプロットの重要な部分における服飾描写しか扱えなかったが、今後の課題として、改めて他の部分についても検討を加えていきたい。

注

- 1 『沈香屑—第一炉香』は1943年の香港を時代背景として、上海出身でごく普通の女の子葛薇龍の不遇な道を描いている。薇龍は香港での学業を続けるため、叔母梁夫人の邸宅を訪ねた。梁夫人は若い頃、香港の大富豪の妾となり、遺産で贅沢な生活を送っている。かつて薇龍の父親に非難された過去があったため、梁夫人は最初、下宿させてほしいという薇龍の願いに気が進まないようだが、ピアノやテニスに器用に対応できる薇龍に利用価値を感じ、その要求を飲んだ。その後、薇龍は梁夫人からの援助を受

- けて学業を続けると同時に、梁夫人のために男を釣り込む操り人形となっていく。本論は『張愛玲典藏全集 短編小説卷一』（皇冠文化出版、2004年、130-183頁）所収の版による。
- 2 『更衣記』は中国服飾の歴史と変化を書かれたエッセイである。本稿は『張愛玲典藏全集 5』（皇冠文化出版、2001年）に収録された「更衣記」を参照。
 - 3 『散文集 張愛玲集』、2006年、32頁。日本語訳は筆者によるものである。以下同じ。
 - 4 『張岱詩文集』、1991年、364頁。
 - 5 『南方草木状』は晋代に編成され、中国最古の植物誌である。
 - 6 「已是懸崖百丈氷、猶有花枝俏（氷はもはや百丈の断崖に掛けているが、梅の花はまだ美しく咲いている）（毛沢東「卜算子・咏梅」2002年、113頁）等、梅は寒さに恐れず強靱な闘士として文人墨客から賞賛を浴び続けてきた花であることから、「梅模様」は不屈で気高い精神を象徴している。
 - 7 中国では、「朱漆大門（朱塗りの大きな門）」の説法もある。呉裕成（2011年、29頁）によると、「六賜朱戸（六番目の恩賞は朱塗りの門である）」という皇帝が功績のある人に下賜する奨励法があるが、「この恩賞を受ける人が自分でも自家の扉を朱塗りにする経済力がそろっている」と述べた。
 - 8 『張愛玲典藏全集 5』、2001年、26頁。
 - 9 謝黎（2011、61頁）は1920年代から1940年代の旗袍を論じる時、素材やモチーフなどが伝統文化を重んじる「京派旗袍」と、「衿の高さ、袖の形、裾の深さ」という三つのポイントを巡って改良された「海派旗袍」の特徴と相違点をまとめた。
 - 10 『史記』（2008年、卷二十八封禅書第六）によると、「寿星、南極老人星とも言える。その星を見れば天下の安らぎは期待できる故、それを供えて福寿を祈る」という。「寿星」は年寄りを指す。「祈福寿」も年寄りの誕生祝いをするための風俗であることが分かる。
 - 11 『第一炉香』は語り手が沈香に点灯すると共に語り始める体裁をとり、結末でそれは燃え尽き、冒頭にある文章、「その沈香が燃え尽す頃、私のお喋りもお終いになるはず」と呼応する。

参考文献

- 池上貞子「着・語る作家張愛玲」『上海モダン』、勉誠出版、2004年。
 王勝群「奇装異服の張愛玲」『野草』第93号、中国文芸研究会、2014年。
 陳美怡『時裳摩登—図説香港服飾演變』、中国青年出版社、2013年。

- 張小虹著、池上貞子訳「都市とは華やかな衣装なり」『野草』、中国文芸研究会、2014年。
- 嵇含『南方草木状』、広東科技出版社、2009年。
- 廖軍・許星『中国服飾百年』、上海文化出版社、2009年。
- 毛沢東「卜算子・咏梅」『毛沢東詩詞選』、人民文学出版社、2002年。
- 倪六方「古人喜歡穿什麼樣的“涼鞋”」『北京晚報』、北京日報報業集團、2014年。
- 司馬遷『史記』、中華書局、2008年。
- 吳裕成『中国読本 中国的門文化』、中国国際広播出版社、2011年。
- 張愛玲『散文集 張愛玲集』、北京十月文芸出版社、2006年。
- 張愛玲『張愛玲典藏全集 短編小説卷一』、皇冠文化出版、2004年。
- 鄭如水『人与衣 張愛玲「伝奇」の服飾描写研究』、2009年。

